

壊が伝播するか否かが判定できる。またシャルピー吸収エネルギーと CTOA の関係も求められている。

討 28 と討 29 に対する討議をまとめて述べる。シャルピー吸収エネルギーとき裂形成エネルギーの比が二つの発表で2倍弱異なっているが、前者に比し後者がはるかに大きいという点では一致しており現在の解析精度

ではこれで十分であるとも言える。将来はより定量的な一致が望ましい。き裂近傍の塑性変形範囲が実管では極めて広い (ほぼ 30 cm) ことも指摘された。なおエネルギーバランス計算に関し内圧作用範囲、内圧の減衰挙動、ガスのなす仕事の算出方法について議論が重ねられた。

統 計

鉄鋼業における研究開発費の推移

年 度	研究開発費 (100 万円)				研究開発費 総額の推移 '76=100
	総 額	基礎研究	応用研究	開発研究	
1976	99 836	6 815	26 015	67 006	100
77	103 681	7 052	26 208	70 421	104
78	107 922	6 317	27 753	73 852	108
79	119 991	7 149	29 227	83 615	120
80	147 100	8 100	34 800	104 200	147

(出所：科学技術研究調査報告 (総理府統計局) はか)

図 1 は 1976 年を 100 としたときの研究費項目別の推移であり、各項目とも金額は 1979 年以降大幅に伸びている。また、図 2 は、物価指数を 100 としたときの項目別推移であり、開発研究、応用研究は物価上昇を上回っているが、基礎研究は、若干下回っている。

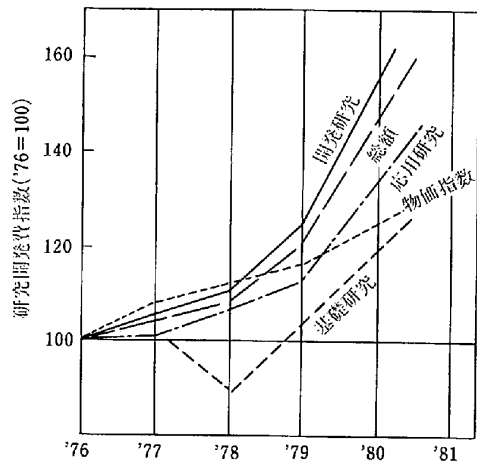


図 1 1976 年を 100 としたときの研究費項目別推移

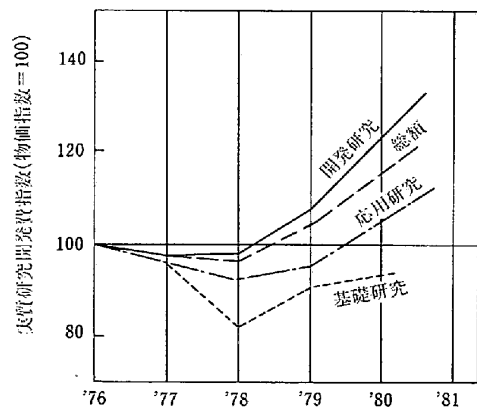


図 2 物価指数を 100 としたときの研究費項目別推移